



中村俊定文庫  
文庫 18  
890  
2





俳諧寂琴卷之中

白雄坊選著

拙堂増補



昭の事

昭と字の眼をさくらめてのち魏向を  
半くへり字眼を礎よりみく十世武  
さきと句意し水入しとさよ下の  
端あり

續

八九箇やふる作の柳の事

公羽

まきの鳥の圃なる事

沽圃

中村俊定

中村俊定

是とて場の字の所をゆゑに

赤川集

荊榛也水田のうへの秋の空 酒堂

さるまゝの月よ代わゆる層 嵐竹

是とて白より場の出るゆゑに時を  
字解よとせりめもあやう

炭たき

梅うきよの川と田のわさし路の 翁

少とらうとて維乃呼とら 野坡

是とて赤より場も時りもゆゑにゆへ  
半く時をいをせりせりる路と

ころも

市中いりの白りやまの月 允兆

いすしりしと門くの字 公翁

大石田多住

か月をきあつめはしる上川 公翁

岸尔ほとつあくみ統 一榮

是とて赤の路あり赤の路の路いせり  
ゆゑにゆへに軒垣を柱とほりるを  
たとくは海とらりゆへに舟岸を  
とらりゆへに舟とらりゆへに海川とらりあるの  
とらりゆへに路の路をさるへし古式云  
吉野山よとて妹控山よ月と路い  
ゆゑにゆへに月よ妹控山とら

あけのぼり 龍のぼりよかきくはひる  
あてもぬあしはらうえこ

あけのぼり

あけのぼり 浦のき 加生

あけのぼり 其角

あけのぼり 浦のき  
あけのぼり 其角  
あけのぼり 浦のき  
あけのぼり 其角

あけのぼり

あけのぼり 野水

あけのぼり 野水

あけのぼり 野水  
あけのぼり 野水  
あけのぼり 野水  
あけのぼり 野水

あけのぼり

あけのぼり 野水

あけのぼり 野水

あけのぼり 野水  
あけのぼり 野水  
あけのぼり 野水  
あけのぼり 野水

あけのぼり

あけのぼり 野水

三

三

指の楸の落はくも 且藁

是は前年の根に於るいかくのこく  
はくも入るを礎と云く古式あり  
まらあをこしみるの根をさすてはあ  
さるとい上下の端形一とまこはれ  
をさすてはくも入る

ひさこ

ひさこの名もゆきしてまのま 珍碩

きくして楸の葉いさめぬ 公翁

ここのまふ葉の根に根を礎を文  
あつてはくもここの根かくのこく  
まらあをこしみるの根をさすてはあ  
さるとい上下の端形一とまこはれ  
をさすてはくも入る

好む魚うき

きの日

そお月や霧のはくもあひま 荷兮

きく乃朝日の表形のま 翁

是もよふ葉の根に於るいかくのこく  
はくも入るを礎と云く古式あり  
まらあをこしみるの根をさすてはあ  
さるとい上下の端形一とまこはれ  
をさすてはくも入る

深川をさすてはくも入る

ひさこ  
ひさこの名もゆきしてまのま 越人

三

三

酒志おむらうよりの月 翁

是は酒客の酒と酒客の酒の遠近を  
ゆきとて格とくもく人の客の自のり  
真の自のりを踏ゆき遠近の  
客の自のりも踏別をゆく  
酒客の酒と酒客の酒と

くまの文庫

新妻のくまの文庫 山店

又お杖のくまの文庫 翁

是は杖別のくまの文庫

新妻の文庫

酒客のくまの文庫 風流

くまの文庫 翁

是は真のくまの文庫のくまの文庫  
遠の酒とくまの文庫の時客の酒とくまの文庫

後日記

志として又杖のくまの文庫 如行

志として又杖のくまの文庫 翁

是は志として又杖のくまの文庫のくまの文庫  
その酒の客の酒を踏ゆき遠近の  
志として又杖のくまの文庫のくまの文庫

くまの文庫

志として又杖のくまの文庫 重五

人の粧ひを鏡磨を  
荷分

りつねいじ  
鴨鳴也弓矢を捨て十餘年  
去来

又花をぬきおの小刀  
嵐雪

涼川集

辛口とる危よ梳の花かきむ  
酒堂

狭きとる器置のふし  
素堂

ここのけ侍捨ををりしこと自らの  
人まゝしてこのむるつこ

補

きつりの巻  
けし形也ささるる急氷室  
藤白

金涌の郡豊浦の春  
千春

これあきるおかしあきるよあきるよあきるよ  
舟の根と根侍さききいふあきり  
自ぬの人形さききいふあきり

### 才三の事

空院法外  
陽火まよ野飼の牛の梳ぬまを  
翁

まのり  
野葉中侍もあきる情の折折て  
、

り  
歯乃あのみ初狩人うき不負く  
野水

...

...

新編

中

用をすらん本奥掘く 嵐雪

西風十寸穂の小貝拾をて 泥土

て

ひまに車を琵琶のかたみそ 野水

是めて菊こみさる新菊のよきかすこ  
みて菊を焼く哉いあまの後とて  
あまのあまのゆいこ

新雪志を新くする月を計ふ 野水

馬射のころころいふ牧の野よ 公箱

このころあまのりみ菊のよきかすこ下より  
よまかふるさかすはくあまの

月のきふあまのりみ新雪志  
牧のよきころのころいふ

あまのあまのりみ菊のよきかすこ下より  
よまかふるさかすはくあまの

り

藤をるくまの宮野屋よめてけん 翁  
みかすくまのあまのりみ新雪志 曾良

新編

中



山嵐集

山嵐

是らん留くらん留らよらららら  
てんてんてんてんてんてんてんてん  
親いの詞を

やひらりけきりふらららら  
たき かりおそい  
てんてんの詞をよらららら

あし  
夕を夜深おとて 留らららら 冬文

けるよらららららららららら  
やとやの文章を在中よららららら

久ららららららららららら  
あらあらあらあらあらあら  
あらあらあらあらあらあら

詞をよらららららららららら  
てんてんてんてんてんてんてん  
をらららららららららら

てんてん  
雪を夜深おとて 留らららら 冬文

てんてんやらららら

山嵐集  
山嵐の詞をよららららら 嵐蘭

是もたらららららららららら  
てんてんてんてんてんてんてん  
てんてんてんてんてんてん  
てんてんてんてんてんてん

蘇我氏

明

みづの日

花蔭馬骨のおおよ喉のりり

杜國

是もみま飯名の中とこ立ま飯名の中と  
まのりりまよ下の中みままのりり  
あまこのめををみる

飯後 門柱

まのりりまよ下の中みままのりり  
あまこのめををみる

時を 机 筆

まのりりまよ下の中みままのりり  
あまこのめををみる

ひらふ

此南ちのりりまよ下の中みままのりり

珍碩

まのりりまよ下の中みままのりり  
あまこのめををみる

蘇向地香うはまの事

かまのりりまよ下の中みままのりり  
あまこのめををみる

まのりりまよ下の中みままのりり  
あまこのめををみる

まのりりまよ下の中みままのりり  
あまこのめををみる

まのりりまよ下の中みままのりり  
あまこのめををみる

又

洗源川集足下客し名めつくとまこの水 酒堂

三十一

中

綿籠なるぬきむきの里 許六

鷓鴣踏みの鑑をつつひまゝ 翁

まぢらうそまうし種もまうら 嵐蘭

月の色水ものうつる小軒賣 六

筑前地のやうの典葉の駕 堂

相國寺あうんのたのけうりて 蘭

檜の蓋しる落し竹の子 翁

かくはるの内箱のる形をみてもまうら  
むねむしあまあうら一巻のりか  
あして百負よこ世をたふしむとみよ

ふしとて終るるる

何そと入るゆも終るるり也 野水

花とちる此ハ酒念うころもまて 翁

又

厚ゆくちや白子さる松 翁

千初むむのさう一の此 回 珍碩

かくのさうさうの定むたのなる秋ま  
うらうらうらうらうらうらうら  
あうまうまのたの所うらうら  
まうまのさうまうま

三十一

中

たうるゆへりそる体さうけてらるの  
重なるも附らうたりり 稗草まなうる  
ともすま秋ふ勿編をまよふも附らう  
まらうこそうりのを得てまらう  
藪へ 彼岸 峯へ  
たうのきくひ春秋二重なり  
そのれめとうりうこらる

補又

あうこころ仙

夕ちのさなまむゆる雷のまき

楚竹

るもあうぬ山陰のまき

東睡

小野庵のそまきを射つまき

翁

花あふふほくあはれなる月

越人

こしよからきてるのまらうる月

荷子

又

新庄系仙

雪降ぬねをまのねと肥らる

如柳

そ秋踏まけね徳めはる

公程

他要らうるいまをり秋まよまらうるも踏  
あうたりき二るのるぬるまらうる  
らうらう

二句一意の事

新庄系仙

中世

冬の日

秋禪のこらふ声きくまのうさ

野水

と藤乃実けくみ索あつら

重五

又

冬の日

しこありの帛きて寝て世の中

冬文

雪一後二折も彦ふふ

越人

又

つるき着

顔面一旅ふくまのふて侍とあり

去来

くまけをうらふそむとみ水引

嵐雪

又

須加川系伝

ここの湯もさるある浦系

翁

穀を石の下をふ

等窮

二の一をさるるよりのうらみあるまの  
うらみ顔面をさるるうらみをちうらみ  
さるるうらみをちうらみ

補又

ゆりり

半をさるるうらみをちうらみ

調和

山をさるるうらみをちうらみ

又

山をさるる

山をさるる

いしんを

おききせむし毛衣人農うんへも 幽山

考の心志うも富る秋の戸 執筆

こころのゆるもさるる一巻のこころや  
あふり  
唯此の藤の川一巻の心をさるるふらうや  
とくし一るめを切をけんしとるし  
一巻をこめしとるの也心をさるる  
一巻をさるるし

於ものけいの事

あらし

うらみゆる涙は暁こよとまらそ 越人

静法あよ涙をよとまら 其角

あらし

羽とと敵へ首たてしむ 重五

小ころよととせむらつぬい 翁

又

あらし  
發心のそとんを執る鈴鹿山 翁

内苑頭うとよ色つとと 乙尺

又

あらし  
百と腐つてアと母の妻ふ 野水

元故う草の種もやとぬる 翁

あはれなき

中三

又

まきの日  
嘆くけの葉もよみさ白露そ 越人

秋の和名よかき順 旦蒙

取もくけの白月日さすのありある  
附るともふそむねあふくさくさく  
秋もよみさのあけ付もよみさの  
附るともふそむねあふくさくさく  
ふねあふくさくさくさくさく  
ふねあふくさくさくさくさく

補又

は川集

類あてはさくして月をうちまふ 曲翠

悪七を傍景清々 秋 酒堂

名新より名新を所ふ事

は川集

深草の女くさくさ下るさ 酒堂

伏見の意をへ相あさく 曲翠

こき深草より伏見とみさくさくさく

宇院法海

世をいハ舟の影白の死返山 許六

庵舎の温白水をいふえみさ 夢由

さくさく旅舟のさくさくさくさく

は川集

中三

この名をうける名所地名はよこし  
所らうしなま

深川集

初志子 伊勢のあまひのし初と 公羽

くめささきをく官川乃上 山嵐

是所勢とりし子し国の名所を跡くこ

補

栗の茶

以てし不便や妹捨の月 翁

散る花は垣根を穿つ嵐音 嵐雪

この日国の名所子日玉の地名を跡

中るこけかみもたひありしる今こけ  
こしよさゆいしうささして名所よ色  
を跡くさすけち名所を跡く

志半し跡の事

白解百負

敵ふた力あるむしおの勢 千里

晨明ふ初子うち鳥帽よ志あり 翁

又

深川集

山依を切てかきくる関の前 公羽

覆さるる松のたすしぬ世の中 酒当



須磨寺の汗の情を説く辞

又

須磨寺の汗の情を説く辞

重五

みゆく、泪笛を吹くく

荷分

又

いんまの  
まのまを指てがらぬ捨ちし

元北

みゆい切らぬおねひんよ

史邦

又

わらわ  
何れも長安とこそ名刺の地

翁

匡匡のまをこそを同らるる

越人

こころの一巻のりやうなりとてさへ

大勢の中の人をささるる法

みこ  
ひこころを強弱の涌湯の夕るるる 曲翠

中しよせんの高ぶら 休翁

又

らん  
こころのゆるは雲あふめ人ふ人 其角

こころのゆるは雲あふめ人ふ人

こころのゆるは雲あふめ人ふ人

こころのゆるは雲あふめ人ふ人

こころのゆるは雲あふめ人ふ人

こころを月の本

そのは

お風よまらぬを酒の酔 羽笠

葉のこゝたるを水あけ月 執筆

又

春の曉の風よ吹きまわれ 野坡

馬場の鳴る鐘の夜よまじ月 嵐雪

是もあつと月を古風こころの月は  
月をささるる月とつらまを  
破よぬこころの月よまじ月  
なると月よ縁のほろこころの月

空をぬく月 楊をゆく月  
洞の月の空の縁をたたく月  
縁をたたく月とつらまの破  
まじ月

又

お風よまらぬを酒の酔 園風

葉のこゝたるを水あけ月 猿轡

古風よまらぬを酒の酔  
古風をささるる月とつらまの破

補 他の事よるを花の葉の事

白解百頁

稻付戸成木のちの花のうらひせ 奉白

秋葉あを花を所より月よを借ひて  
陽る花よを一葉の露よりそ他も  
事ありし舞を所より他の木のつむぐら  
夏秋あきの内よもく正花なるへきを所  
積るりし又露の花といふもあるし  
まけと元禄の正花よふんあてくすゆん  
あふりしと古哲のさふりしと似ぬ  
なまへく

宿りのばり

そた火もゆるも水の仇ふせ 一禮

こもと顔人の秋の花をぬるる

夜日ニまぬ

こつらこつら小ねらきて花のあふりし 荷分

是をまきの花をこねへーあふりし  
こつらこつら

無尾集

いたふ付をさる場の酒花 翁

是を顔人の花をこねのなるのふあふりし  
て所をこねるこねるをさるといふるなる

無尾集

さかいふんよ月を漕ぬ 路通

是を顔人の月をこねるこねる

無尾集

世傳の縁鬼より成る月と花 翁

こつらこつら世傳の縁鬼より成る月と花

踏すゝの海雲の雪の朝月夜 岱水

ふらの日

旅衣 笠よの風をうら講ひ 羽笠

是のそねといふことと落着くは漢語を用ひたり是も等由なるふふことなり

ふらの日

糸揺腹一とつらゆふを去来

ふらの日

こゝろふむしゆの橋吉野山 仙化

世二白のそねといふへき語をこつとくはきりくをそねのさうく橋をさうとつとよふりとも先をたつとくはさうとつとよ角ぬかふといふくもつたるとけりまきん

雪一他の雪の花は花の古人も多くそねのこゝろはさうとつとよ

補 あまを匂の事

あまを

花のほほ後まゝもうら山 越人

田あゝを吟を野こゝに 翁

又

松田とふ山

常盤山を登るゆゑ花後を 桐葉

手腹りのらね連歌師の松 叩端

是文章の節の揚るなりあまをいふことなり

あまを

松田

一巻のてそりさのまに宮易は跡るさあ  
そそあふのまの銀のまに（註）註せしめ  
るさうさうさうさうさうさうさうさう  
跡へかゝるに税の巻を形に税加の  
まのこのりさうさうさうさうさうさう  
税加さうさうさうさうさうさうさう  
あゆ揚るの作ありより考へるさうさう  
當時の税加あきるを味里はははははは  
強さうさうさうさうさうさうさうさう  
るさうさうさう

よの月をさ 荷分

君のつゝえ氷ふさうさう 羽笈

さうさうさうさうさうさうさうさう

山中の巻

持てあささうさうさうさう 翁

酔ね人と強さうさうさう 執筆

その北枝曾良祖翁と山中の温るさう  
想いさうさうさうさうさうさうさう

法茶の枝折

古うちもさうさうさうさう 野童

鬼貫直子と馬楽堂とさう 瓢界

さうさう鬼貫直子のさうさうさうさう

ひらり半

廟中なる幣小胡蝶の中さうさう 調和

さうさうさうさう

さうさう

調出る母の齡のまふ日 調和

こころの調出る母の年如きの暮のあけ  
るなり

海舟集

晴るのふ咽かえさるる花さかき 乙品

ふさふさのあつさり八重桜の水 沾圃

こころの暮る哉扇あそびを時いかくはを  
るすか留るをも跡くふく

連歌あを接は花をも跡る他何あくも

正しきさくら花跡いりしゆらうそを

跡をもあつさりてゆきとほ花よ係を

跡をもあつさりてゆきとほ花よ係を

あつさるの正花あつさるあつさるを  
跡ることあつさりてゆきとほ花よ係を

恋句の夏

あつさるの正花あつさるあつさるを  
跡ることあつさりてゆきとほ花よ係を

縁さるるあつさるの眼跡さるる 翁

又

大橋ふたりのいふをぬき道とて 半残

能く流紙のともをぬきたのこ 土芳

三十一

中

又

うそまの干菜きらむらゐのを  
るう山崎日以内てゑるる  
翁 野坡

又

あゝ野  
まぬくやあふかそくひてやふ  
風ひきたるふ野のうは道  
越人

又

るの月  
顔ゆくはよ梓叶居る  
雨桐

黒髪とみえぬる袖切ぬ  
荷兮

一々の情二々のる乃情をりてゑてとる  
詞のこゑのうりともをこゑのこゑのこゑのこゑの  
一るあを捨るこゆは女娘なと出てもる  
俾ふよりをゑるるとしてとを是ゑのるの  
さゝささぬり

補句かゝの事

何者の心まちじゑる道の原

是れを是れはと集めるるこ古人の集と  
とも一覽のともさうりこゑかふり  
又るるかゝるるを修めりとも

三十一

中

古人の名よあるへうまかき拙さるハ  
きよれよもひりしとあふへい

早乙女の産をいある〜爰釋

口丁いささめ人の生の中

是い東都めて甚流と唱ふるその  
集中よあり意のわい出んとてら  
さいれらるとさあゆとなるこりたり  
秘子兄弟君臣の間めさそわのぬ  
らああり且風流といつとを後  
もちり

赤川集

掛乞よ意のさうをいせさ 公羽

かくいんもさ意の情も風流もあり

まことまことよみゆのうううよ  
らるへりしを氷清玉流といふ  
意のわいあさきさゆ源切よいふ  
む意のわいあかきさきさゆのうの風  
流二るのうの風情をいふさきさき

行水の時面目をけしぬいそ

よの等ういぬい意もはなふ

こまらうのわい中事あ英流尾流中  
流のせしるこいふあさのなつ二るの  
間なり業時英流尾流よけるの情を  
いふのひらきよささる時基士朗と  
出と元禄のむりしは後でいふこ  
甚意の意さきさきといふ

赤川集

中



三ノ巻

百姓寺人御母の教

あしりゆる物々やけくや也百姓寺作  
寺こしつり中しこころいふあはれ  
福し元福の徳風をさる

知く疾かるやねいさる寺なれや

けるあくちる金一

さめくよおつるまゝる意をして

百姓力うちおをらの少将

とて角の所くまふ人由縁一そ  
無由階けりさるみゆをさるよ  
そのら作かまの上ゆめを同ある

さめくよ品からりさる意をして

うき世の果は 於小町也

と所くまふ人由縁一そ  
らふらひらりて縁持しと其角の  
非を悔ひらぬこと白旗を結ふりこ  
つめり

縣向二向のる理座の事

あゆみの町はさる由の果

ひく声もさるる松島寺

是年をりて悟りつてゆふ理座あり

三ノ巻

三ノ巻

一ふたはなもて町のあるところを  
たふしつゝふりつゝいりあふ

雨の音も静かには 六六也

真ん中ふかきよ 掬の小使

こころさしつとあふふ 藤のふちがほ  
ふたのゆきも人よふとせらるる自のるゆ  
りあふふとせらるる自のるゆ  
古く日藤をよみし川をよみしと  
ふかきつゝふりつゝいりあふ 風暗  
路く

坊主の連は油で風ひく

こころさしつとあふふ

しんせう

此の国の青空をよみし 凡兆

かたの庭をよみし社 公羽

白集

火ののろむをよみし 去来

ほとけのつとめをよみし 公羽

こころさしつとあふふ

藤の絡路のありてい

たはは

敵の門をよみし 曾良

こころさしつとあふふ

しんせう

かき清る母ハ野中の地花堂 露路九  
妻あゝとれを山犬の色 公羽

續三十一葉

谷からふおの扉をたうれく 具角  
る故をそらゆるひらの偷り  
都あゝとれを山犬の色 牧子

韻集

いりやふあゝもあつへきとれ 式水  
此色をかへて出る家物 翁

辰明子思海に書の小あま 詠六

義の森

ひらやとあゝ此をたてて写る 彫棠  
中かやうとあゝはもけよなるを 横几  
あゝあゝとあゝあゝあゝあゝあゝ 公羽

其代

雲の外清をたてて写る 露路沾  
履そとあゝあゝあゝあゝあゝあゝ 沾荷  
八月廿九日 武者一人 公羽

山崎闇斎

一冊

壬の日

身を重くし一衣の骨をほく世ふ 荷分

飲体乳をかき阿羅山 昌桂

雲を拂ふ鏡よ人若影の如く 雨相

保川集

都を去る去るの行跡よ思ひぬく 利合

兜より内なる釋迦堂の暮 酒堂

嘆そのあそびの便もさるるま 出羽

とらふ山

氣身と臂の重さゆゑの門 支考

海唇の里をゆしてふちまゝに 女草

啼ちてはあやのそよめし 翁

たのき

世をよみよみよみよみよみよ 其角

乳人用よみの中をとりおきて 我拳

志やうふ其のよらめも論よめて 嵐雪

つらむ

涙かゝると圓れたる数 其角

山崎闇斎

一冊

娘むすめあつくるさのつらさを  
嵐雪

小原まよしの血をよきと  
其角

小文彦

佛の本地を包むるふを  
翁

ふらふらと白挽出でるほろも  
山店

おろろろそそのかせる竹振  
翁

さよふと

鳥のけりたる浦の深さの  
北枝

籠へを降らせとく月のを  
牧童

木櫃を原えて皆を  
北枝

三つ葉

さるは流美女衣似はよ投  
其角

なひくをとくを柳のし  
松濤

世の情と遁世みのいさめを  
卷白

笑月記

志をくくと鬪あつめる眉のま  
杏雨

結縁縁のつとを終るま  
杏農

あてなきは言の終の時鳥  
落梧

あてなきは言の終の時鳥

あてなきは言の終の時鳥

古今和歌集

こころ

米ヤ都河とつとつとつ花子今

助史

葦靴の火のぬるた如月

園女

まよふの草履つらふと飛越て

山人

あつた

秋の夜旅のほ連歌いにかさふ

翁

をくかく暗て留士えゆる寺

荷兮

寂しく桂の葉の落るる音

杜國

あつた

顔よりのそつてうとそそ森の尾

其角

鈴繩ふ蝸のさそんいびく水音

孤屋

一層のやうとそそ秋夜あうふく

其氣

あつた

畑穂のほくそそ秋のそりそり

公翁

あやみくそそ妹う夕なやうえ

越人

あつたのそりそり秋のそりそり

公翁

あつた

弥勤の堂ふ思ひうち海

枳風

古今和歌集

和

枕

待宵の清らさるるそのの中  
友よの鏡のまのうきの色  
翁  
山化

経尾集

清雲はまき鳥うみふかりさ  
曾良

小袖さるるをまじり戒の師  
不玉

ころ顔の母よ似らるもか  
翁

後さるる

禅寺ふ一日あまふ砂のう  
里圃

櫛の角のたてぬ雲穴  
馬寛

濱山の牛よ徳をたろよ也  
翁

世江家仙

人ひきかきさくらのさるる  
曾良

松栢さく嵐のねとまなり  
石雲

ま紙射さるる秋猪の産  
翁

相馬山家仙

国路をよよみあつたる日月  
露路九

つら顔よちらまかたつたる  
重行

旅を小幡とほき  
翁

古今和歌集

中

五

ひんご  
はるの夜のさかかぬさかぬ夕暮る

珍碩

親みたくして月ありのよ

秋の夜宮ゆのそくせふあひりの

路通

大伴の巻

擣衣をぬめを環の糸よる

松洞

うきまゝなる女は馴て日をばりま

奇香

矢角の腕のとるる意の種

翁

いんげんの巻

あはれは海嶺の猿をよよさけそ

猿雖

雪舞の中をなほはるしき

雪芝

志あせして矢擣の船ふらふはら

翁

宇陀法師

たれあふくや流月よ由

李由

た遷の持持りたそよ舟便

許六

たれと喚よのふあふさけり

汶村

くさの巻

里人ふ蓆の紙ほくこと秋のる

越人

月たふ波よ重石めく橋

羽立



ころひきる木の根よ花の影とえ 野水

類寒

うらむる白も花の本かきおそ 岱水

はくものうらむる卵とら 翁

まづはく臨者の宿まかりしを 許六

子寒

結より紙摺乃指す筋とく 翁

こころぬいぢをむかかんけし 露沾

志るるなまき記念の歌書もまき 沾荷

云の目

遠くまきとまきの温泉の山 翁

のまき也筑紫の枝伊勢の帯 越人

内侍の携む代この眉の圖 荷分

あけ

本堂の中にあけ壁のけしら建 正秀

四階後の杖をまかり給ひぬ 珍碩

歯をいつむ人の姿を給まて 正秀

あけ

中

るは

つるみみくろく行藪の表

釣雲

盗人亦はとそ妹を流る

翁

新しきけきぬ園くの井

曾良

あつせ

木狭きぬき形河の枝

長缸

秤にかゝれ人くみの奥

故及

世年よたるとて各々の流もあき

一井

と旅百夜

後経女きぬくうらく

其角

山ありと乳を呑む精の声出

工齋

命を甲斐の掬ともえよ

枳風

るは

下りたむらうをうらめしめ

其角

よきよのやぬ江の海をえみらして

溪石

よきよの中侍の麻衣

琴風

歌集

るうとぬきて世屋をくらふ

李由

いひさすての食屋をそひむ

木導

古今和歌集

中巻

古今和歌集

卷

三

早麦ひらくむ并松の風 朱迪

さるるの

又逢をゆふいよ新くをら秋 翁

をゆふよあつみのふるる神おし 去来

ゆくゆくを蓋のひそぬ半柱 元北

きののり

血くくれあくく月くらくくさる 荷兮

あかりのそむ郷の鐘くらきく 杜國

ふくま川納をたをさく 野水

ころころ

摩耶の高松よほのかけさる 野水

夕ふくふかぬまふ冷風葉を 元北

軽の口まよをかきてま味くら 翁

さるるの

的場のまゆよ嘆れ山吹 釣雪

春をを清く七らの年乃力石 翁

汲ていそくく醒る井の水 露女

古今和歌集

中

三

酒とて

月河を礎の楹のはえうや

嵐

くも風を森はる酒

虚公

傾城のさひゆる教あそぬ也

其角

ころこの

渡舟のすこ記書るちうねき

史邦

隣をこつとて車引ごむ

元北

うた人を招穀垣よりらせん

翁

あきの日

今婦の君の采りんとよき

重五

新中侍津沼のあよらぬゆ

荷兮

佛らあまらるゑんあきなり

翁

あきの日

補 藤表ハるるおまへ

工山

笠あて衣の破を綴りあれ

桐葉

秋の鳥の人吟をゆく

翁

己うとえ

安くくあ剛の海系を抄後

翁

夕がらの振るもりのこまき

半残

あきの日

三

手枕より男ものへ情もつと細  
土芳

ほろの巻

鳥の巣もつとほろあつと尾  
翁

二月も落り甲ゆもつとつて  
葉夕

阿しよ光ふ雪のゆき  
曾良

水須の巻

名ふのびりふ山井の岩後  
翅輪

橋衣うもつとつて尼まの家  
曾良

阿の月も急ゆふしそかきつと  
翠桃

赤の巻

高田の雪集てもむうと也  
其角

白文をふ園のゆかぬたをふ  
嵐雪

きりなき風の石葛もつと  
翁

郵便紙

空待りつとつとつと秋  
杉風

東唐を釘ふかきつとつと家  
濁子

唐うちを落つとつとつと倉摘  
涼葉

水須の巻

赤の巻

山中の巻

あゝと降ちるの山の麓の寺  
菫女はも人田舎わらへい  
お君の名もあつて  
北枝  
曾良  
翁

あゝと降ちるの山

鶯の尾を松葉の国は掛られ  
風を刃をさきあそ付  
華と下す木の庭を歩たれ  
叩端  
相葉  
叩端

別を著

山のかつらる下市の里  
子珊

その外のほろろの霧の気むらじ  
杉風

西日乃月もすこお影  
桃隣

宿屋の坊お

何のくまもふ形を縄の糞  
おそ路もやいほの年のお見  
死うそもそ又あわらまを  
瓢界  
立志  
野童

あゝと降ちるの山

枕おとをさるる田の中の小田  
ほとよす舞をさあやうつらん  
塔山  
路通

あゝと降ちるの山

中

こころその思ひ浮世 人 翁

徳田三喜伝

鳥羽玉の切女夢よふ来こ 叩端

高のちえ破る葦葎の月 翁

秋を程多味ふその舎ひたり 桐葉

徳田三喜伝

流く酒天むまふりくす 公羽

とくくと枝の風のあふれ音 野坡

稀盗人の縄といて屋敷 公羽

他 破集

菊蕪の色のをふも現くしを 治蓬

ぬあゆす浅い庭の敷鏡 曾良

つる秘のり供ふ今年寝癒の痕 翁

鹿島伝

たま鳥の火よおくゆく在馬 越人

瓦社よぬあふなる月 杉風

不意を所ふ人を引よるく 苔翠

徳田三喜伝

中 三

寒の巻集

縞の仕出の流竹帚扱  
酒堂  
月影もささく海老の煮の長  
詠竹  
杖一本を道の程迄  
何中

とまらぬ

やもとりとくが途坂の折  
公羽

農明の志を隔て馬と駕  
車袋  
冬終志をさうり  
木節

ひらり

拾ふおのれよ戒律の尼  
調和

羽と志の数年木の葉の禪の売  
立志

風吹くその日紙吹くを降  
直方

小川集

あふ海の人魚鳥よ也  
翁

る乞の志を飛うる浮出を  
丈艸  
傍草をこころに指管の葉血  
惟然

素秋の巻

満簾の糸角よ志をさうり  
丈艸  
歌の七声く鳴りてあつらふをさうり  
路通



輝の中へおろす早桶翁

こころを落して俗よらるる所の  
雑俗よあそぶなり

縣向自他の事

硯をむくひまを捲け 自

初めの荒雪をうひら夕少ふ 時節

新ふるおれはく女印群 他

け外附くとなり

むらゝ火よ尻ら流也かふるむ 他

松風落く水のりま 其場

さうとさうと群のさめる 明屋 向

いお附方なり

並ふのさげのさらくと落 時節

巡礼のふか抱きる 朝の月 他

旅新目ゆらるる 船泊りいきむ 他に向

以てうらむ 紅赤のさ 他の巡礼の  
あり

そのさ衣もさるの 名残と 自あを他の  
向むなり

いさりのお附方なり

落瓦あじし、松よ志はまき、  
其場

比留りたるを、  
自

着病の粥ふき、  
他

さるりの、  
自

けふらの外階を、  
自

花よりけ、  
他

志るる居り、  
他の向の階

後也先裾、  
他の居の

際をを、  
自

いふらの外階を

葉よたる、  
自

くるも、  
他

おちれ、  
他

流るく、  
他の向の階

いふらの外階を

鯨窓一二、  
他

せり、  
他

乳、  
自

いふらの外階を

あはしきその鞋は接のつらきもの 自

いのちありその活糸の春 自

又よじは揃うりよの女房は 他 自

いふ語

巻くくふ骨もむふふ来ら 他

うき世の津もたのりた哉 自 他

西国をうく都も旅あをきや 自

藤白を自他のころち肝要たりとてこの  
轉しをあらわしけあは踏きさしと  
いふ自他のころちあは人情あは

踏きさしとていふも也人情うちつきて  
とていふ其場を場所あはらし時  
附ふ天相は五ツとつてさしとも踏

人怪たふおるころはくはあは  
人情のるを人情なきをあらわして  
何しといふもこの轉りたるゆへあり

人情ある二るはまたさしあはさし  
るいふもいふもさしあはさし

まかきいふもいふもさしあはさし  
ると唱ふはあはし其場を場所のあら  
附ふ天相と唱ふはあはし

其場

其場 挽曲め平を門の馬はた

補 うけらふりえそかき川筋

いふ語

其場の  
あはらし

補 赤くすすき 紅花のさわ  
凡るふらふる 双たの石

時

日らうもくく 入相の鐘

補

過水の香は曇る 朝日ほしき

時節

雨の松門田の稲葉積ふゆく

補

時を暮く啼て 魚とくり

天相

雲とくふ空六向ぬく 風なて

補

青天よ有明月の乾海を

つらきも人情なるさるなり  
其場のあはらしき 磯机戸 障子  
まてて其場はあはらしきをり  
時節とく 江戸の香かひりるをり  
天相とく 日月風あ陰晴のさるなり  
又人事あて自とも他ともく  
るあり 障子も自とも他ともく  
なり 雲とく

朝中つれ持る持美持る

うしんあもさるうらみ  
かく障子時あはらし他のもく

はとそとかりなるから後河川

く、踊るゝたふなるも自のるふたゝ也  
是踊るをりそふるの角地たはては法に

祖翁曰縣るのりあ舎りゝゝゝゝゝゝ

別三々の轉しこ

古人曰縣るのりあるをりあるゝゝゝゝ

是中ゝ三々の轉しこ

鳥酔曰縣るゝ有用なりゝゝゝゝ

考ゝ有用の所をみりゝゝゝゝ

之々の轉しこ  
白雄曰巻中りのりくゝ味を楚門  
縣るのる味を考れゝゝ

俳諧寂琴卷之中終

福地康重

茶本